

蒙文ガンジュール木版本『賢愚経』における名詞の 曲用語尾の特徴

烏燕嘎(オヨンガ)*

On the Characters of Noun's inflectional endings in Mongolian Kanjur's edition
of "The sutra of the wise and the foolish"

WUYANGA

要旨

モンゴル文語の歴史において、16世紀後半から18世紀にかけてチベット語の仏典をモンゴル語に翻訳し木版出版する際に規範化された書き言葉を古典式モンゴル文語と言う。従来のモンゴル語の研究では、年代記、公文書などの非古典式モンゴル文語の言語学的研究は多いものの、木版仏教経典の言語学的研究は少ない。古典式モンゴル文語の特徴と言えば、POPPEの文法書が多く利用されるが、実際の木版仏典ではどのような特徴が現れるかについて実態を示した研究はほとんどない。本稿では、モンゴル文語が規範化される過程で最も重要な役割を果たした北京ガンジュール木版の中の蒙文『賢愚経』の名詞の曲用語尾をPOPPEの文法書の記述と比較して、その特徴を明らかにした。

ガンジュール版『賢愚経』にはPOPPEの「文法書」の記述と異なる特徴が多く現れる。例えば：再帰所属の属・対格語尾には、女性語に ᠮᠦᠨᠢ <-yügen> (従来の文法書に取り上げられる表記) と並んで ᠮᠦᠨᠢ <-yü'gen> (今まで注目されていない表記) という形が使われるのと同様に、 ᠮᠦᠨᠢ が語幹に連ねて書かれる場合と、語幹から離して書かれる両方の表記が用いられる。これらの現れは出現回数が拮抗していることからこれらの表記に関しては、自由に交替して使われ、規範が確立できていないことを示している。また、多くの格に出現回数の多い規則的な現れ(特徴)と並んで、出現回数の少ない例外的な現れが見られる。例外的な現れは、より古い時代の特徴が残存しているか、あるいは口語的な特徴(要素)が露出していると思なすことができる。古い時代の特徴が残存しているものとしては：位格語尾に、 ᠮᠦᠨᠢ <-ta/-te> ᠮᠦᠨᠢ <-da/-de> が現れる。奪格語尾に ᠮᠦᠨᠢ <-ča/-če> が現れる。口語的な特徴(要素)が露出しているものとしては：属格語尾に、 ᠮᠦᠨᠢ <-i> が字音 <n> で終わる語幹に用いられる。

更に、ガンジュール版をそれ以前の1714年版蒙文『賢愚経』と比較することにより、与格語尾 ᠮᠦᠨᠢ <-dur/-dür> ᠮᠦᠨᠢ <-tur/-tür> の書き分けがガンジュール版で成立したことが分かった。

キーワード : 古典式モンゴル文語、蒙文北京ガンジュール木版『賢愚経』、名詞曲用語尾

Keywords : Classical Written Mongolian, The Mongolian Kanjur's edition of "The sutra of the wise and the foolish", Inflectional endings of Noun

*東北大学大学院環境科学研究科博士後期課程

目次

1. はじめに
2. 蒙文ガンジュール木版『賢愚経』における名詞の曲用語尾の特徴
 - 2.1. 属格語尾について
 - 2.2. 対格語尾について
 - 2.3. 与格語尾について
 - 2.4. 位格語尾について
 - 2.5. 造格語尾について
 - 2.6. 奪格語尾について
 - 2.7. 共同格語尾について
 - 2.8. 程度格語尾について
 - 2.9. 再帰所属の属・対格語尾について
 - 2.9.1. ᠪᠠᠨ <-ban/-ben> ᠶᠢᠨ <-iyan/-iyen>について
 - 2.9.2. ᠶᠤᠭᠠᠨ <-yuyan>、ᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen>、ᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen>について
3. まとめ

1. はじめに

本稿では蒙文ガンジュール版の中の『賢愚経』の名詞の曲用語尾の特徴を取り上げて、モンゴル文語の歴史において、木版仏典に体现される古典式モンゴル文語の特徴を明らかにする。

古典式モンゴル文語について[NICHOLAS POPPE 1974 : 3]では：「16、17世紀に仏教の広まりは非常に進展を見せた。モンゴルの仏教ルネッサンスと呼ばれるこの新時代は、モンゴル文字の歴史の新しい時期の始まりと一致する。統一された正書法が導入された。文語の文法から口語の要素が排除された。一貫されないものはすべて排除された。文字は現在の形を得た。古典式モンゴル文語は全ての文芸活動に行き渡ることができなかった。それは仏教経典の木版本の中のみ使用された」と述べている(注1)。また、[Grønbech and Krueger 1955 : 5]によれば：「古典式モンゴル文語の最終的な形は、1720年北京において行われたチベット仏教の教義のガンジュール木版の改訂版により規範化された。それが今日に至るまでの書き言葉の規範となってきた」とする(注2)。以上の所説では、「古典式モンゴル文語」は、木版の経典で規範化が進められた文章語を指し、規範化される過程で、北京木版蒙文カンジュールが重要な役割を果たしたことが示されている。

北京木版蒙文ガンジュール(yanjür)について、[デルヒ 2011 : 25]は、「1717-1720年において、1683年北京版『チベット大蔵経』を底本にし、リグデン・ハーン(在位1604-1634)時代の写本金字モンゴル語『大蔵経』を整理、増補、校正して、モンゴル木版『ガンジュール』が北京で開版された」と述べている。木版蒙文ガンジュールは、蒙文仏教経典の中で、モンゴル語史の研究にとって最

も完全で、質量ともに優れた資料と見なすことができる。しかし、従来のモンゴル語史の研究では、古典式モンゴル文語は書写語としての規範が確立された以降の文語であり、様々な面で口語との乖離が著しく、意義が限定された資料と見なされてきた。従来のモンゴル文語の研究では、古典式モンゴル文語は、NICHOLAS POPPE の *GRAMMAR OF WRITTEN MONGOLIAN* の記述がそのまま受け入れられてきたが。実際の本版本仏教経典を対象としたモンゴル語の言語学的研究はほとんどなく、したがって北京木版蒙文ガンジュールのモンゴル語がどのような特徴を持っているかについて、具体的に明らかになっているとは言えない。

本稿では、N. POPPE の文法書を参照しながら、北京ガンジュール木版の蒙文『賢愚経』のモンゴル文語の名詞の曲用語尾の現れを計量的な観点から分析する。その際出現回数の分布(傾り)により、その特徴を分類して検討する。出現回数が圧倒的に多いものを規範を示す特徴と見なし、出現回数が少ないものを規範から外れる例外的な特徴と見なす。出現回数で拮抗する特徴は、自由に交替して使われる規範が確立されていない特徴と見なす。特徴の性格を明らかにする際、共時的な検討と合わせて通時的な検討を行う。

蒙文『賢愚経 üliger-ün dalai(説話の海)』(注3)はモンゴルで広く民間に受け入れられ、「üjey_e gebel üliger-ün dalai, sonusuy_a gebel subasidi(見るなら『説話の海』、聞くなら『ソバシド』)」という格言があるほど意義が深い仏典である。北京版木版の蒙文『ガンジュール(γanjur)』には『ᠤᠯᠢᠭᠡᠷ ᠦᠨ ᠳᠠᠯᠠᠢ ᠰᠢᠯᠤᠭᠦᠨ ᠣᠨᠤᠲᠤ ᠬᠡᠮᠡᠭᠡᠳᠦᠬᠦ ᠰᠤᠳᠤᠷ siluyun onu_tu kemegdekü sudur「直接(心に)当たると名付ける経』』という名で収められている。

蒙文『賢愚経』のガンジュール木版本の跋文(注4)からみれば、それはチベット語を再訳したものであることが分かる。そのチベット語訳のタイトルについて、西藏大蔵経デルゲ版では「Mdsaṅs blun shes-bya-baḥi mdo」(賢愚と名付ける経)[宇井伯壽 1934: 63]と記され、西藏大蔵経北京版では「Hdsaṅs-blun shes-bya-baḥi mdo」(賢愚と名付ける経)[Daisetz T. Suzuki 1961: 153]と記される。チベット語訳の元になったものとして知られるのは、漢文の『賢愚経』である。その由来について、『出三蔵記集』の第九卷(注5)に記録されている内容をまとめれば、漢文『賢愚経』は元魏大平真君(A.D.445)、河西の沙門曇覺、威徳等8人の聞いた話の訳である。また、『出三蔵記集』第二卷(注6)の胡本からの翻訳という記録から見れば、それはただ耳で聞いたものを集めたのではなく、胡本、つまり書物の形で存在していたと考えられる。このように、チベット語訳の元になる、漢訳『賢愚経』の存在は知られるが、サンスクリット語の原本は未だに知られていない。本稿では、以下モンゴル語訳『üliger-ün dalai(説話の海)』を蒙文『賢愚経』と呼ぶ。

蒙文『賢愚経』の内容は、仏教の教誨を分かりやすく説いたもので、仏教的な立場から見た賢人と愚人の寓話の集成である。主に仏陀とその弟子たちの説いた因果応報の話を集めて、物語の形で人々(仏教徒)が何をして良い、何をしてはいけないという行動規範の説話が収められている。

蒙文『賢愚経』をチベット語からモンゴル語に翻訳したのは、シレート・グーシ・チョルジワ(siregetü güüsi čowarjiu_a)である。[金岡秀郎 1987b: 217]によれば、「シレート・グーシ・チョルジヴァはアルタン・ハーン時代に活躍した大訳家で、第三代ダライラマの個人的な弟子に属し、

トゥメット領を翻訳活動の中心として活躍した」(注9)。蒙文木版本『賢愚経』には、翻訳者の名前が記されていない。その作られた経緯について、[中国蒙古文古籍总目(下)の跋文1999:1421]によれば、本経はアルタン・ハーン時代の大訳家シレート・グーシ・チョルジワが、ナムダイ・セチェン・ハーンと、ノヤンチ・ジュンゲン・ハタン(三娘子)と、オンボ・ウジェン・ホンタイジの求めに応じ、彼らを施主として翻訳したものである。

蒙文『賢愚経』がモンゴル語に翻訳された年については、以上の四人の揃う時代から推理することができる。ナムダイ・セチェン・ハーンの在位した時期は、1586-1607年[乔吉2012:75]である。シレート・グーシ・チョルジワがこの称号を得たのは、1588年に三世ダライラマが入寂した後のことである[乔吉2011:147]。オンボ・ウジェン・ホンタイジは1587年ごろ[森川哲雄1985:163]の出生であるため、施主になることができるのは、少なくとも13歳ごろの1600年前後のことであろうと考えられる。つまり、シレート・グーシ・チョルジワに依頼があって翻訳が開始されたのは、1600年前後から1607年に至る間のことであろうと推理できる。

版本の種類は、主に木版と写本に分かれる。本研究では、ガンジュール木版を研究対象にする。その理由は、『ガンジュール(yanjur)』木版は当時の国家事業として作られたもので、Grønbech and Kruegerの言うように、古典式モンゴル文語の規範化が進む過程で重要な役割を果たした文献と考えられるためである。

本稿で利用する北京版蒙文ガンジュールのテキストは、内蒙古社会科学院所蔵影印本である。そのタイトルは、*ᠰᠢᠯᠢᠭᠦᠨ ᠣᠨᠤᠯᠤᠳᠤ ᠬᠡᠮᠡᠭᠳᠦᠬᠦ ᠰᠤᠳᠤᠷ*(siluyun onultu kemegdekü sudur)で、252葉両面刷りで、一面(一頁)に31行ある。全12章に52品の説話が収められている。38000語の大量のデータを持つ文献資料である。コロフォンには、主に、蒙文『賢愚経』は天竺語より継承し、チベット語から翻訳されたことと、リクデン・ホトクト・ハーンの功績が讃えられている。

2. 蒙文ガンジュール木版本『賢愚経』における名詞の曲用語尾の特徴

蒙文ガンジュール木版本『賢愚経』には、名詞の曲用語尾として、属格、対格、与格、位格、奪格、造格、共同格、程度格、再帰所属の属・対格が現れる。属格、対格、与格、位格、奪格、造格、共同格には、出現回数の多い規則的な語尾、及びその用法と並んで、出現回数の少ない例外的な語尾が見られる。再帰所属の属・対格には同じ働きを持つ複数の異なった形が見られる。

本稿では、人称代名詞を除く名詞に付く曲用語尾について検討する。

蒙文ガンジュール木版本『賢愚経』は以下「ガンジュール版」と呼ぶ。

NICHOLAS POPPE *GRAMMAR OF WRITTEN MONGOLIAN*. をここでは、「POPPE[1974]」と呼ぶ。

本文に現れる「現代モンゴル文語」は、清格爾泰[1991]による。

「中世紀モンゴル文語」は、Dobu[1983]に収録されている資料を指す。

「現代ハルハ方言」は、塩谷茂樹・中嶋善輝[2011]による。

モンゴル語のローマ字転写方式は、NICHOLAS POPPE, *GRAMMAR OF WRITTEN MONGOLIAN*. 1974に

いくつかの変更を加えた方式による。(注7)

2.1. 属格語尾について

POPPE [1974 : § 281~§ 283]の属格語尾には次の三つの形が挙げられている。

① ㄹ <-yin> は母音字で終わる語幹に付く。② ㄹ <-un/-ün> は <n> 以外の子音字で終わる語幹に付く。③ ㄹ <-u/-ü> は子音字 <n> で終わる語幹に付く。これらはいずれも語幹から離して書かれる。

ガンジュール版では、属格を表す語尾とその用法の多くは、POPPE[1974]と同じであるが、それと異なる口語の現れ、表記のゆれ等の特徴が見られる。ガンジュール版における属格語尾の種類とその用法を出現回数の多い形と出現回数の少ない形に分けて示せば、表1のようになる。

表1 ガンジュール版における属格語尾の種類とその出現回数

出現回数の状況	語尾		語幹末字	現れる回数
出現回数が多い	① ㄹ	-yin	母音字	1076 回※
	② ㄹ	-un/-ün	<n> 以外の子音字	1351 回※
	③ ㄹ	-u/-ü	子音字 n	1971 回※
出現回数が少ない	② ㄹ	+un/+ün	<n> 以外の子音字	19 回
	③ ㄹ	-u/-ü	母音字	2 回
	④ ㄹ	-i	子音字 n	53 回

(プラス「+」は語幹に繋げて書かれることを、ハイフン「-」は語幹から離して書かれることを表す。属格語尾として現れる ㄹ を -i で転写する。米印[※]の付く数字は、規範と見なされる特徴を示す。以下同様。)

表1 から見れば、出現回数の多い規則的な現れは、ガンジュール版の規範と見なすことができる。出現回数の少ない例外的な現れは POPPE[1974]に記述がないが、その現れは以下のようなものである。

(1)属格を表わす語尾 ㄹ <-i> が用いられる。例：

ㄹ köbegün-i (322a:28)「息子の」

ㄹ qaγan-i (204a:21)「皇帝の」

表1 からみれば、子音字 <n> で終わる語幹に付く形としては ㄹ <-u/-ü> が圧倒的に多い(1971回)。語尾 ㄹ <-i> は全て子音字 <n> で終わる語幹に付くことから見れば、 ㄹ <-i> は ㄹ <-u/-ü> の変異体と見なすことができる。

属格を表す ㄹ <-i> については、POPPE [1974 : § 284]では、属格 ㄹ <-u/-ü> の口語の現れと指摘している。この口語の音形は現代ハルハ方言に現れる。属格語尾 ㄹ <-u/-ü> が子音字 <n> で終わる語幹に現れる場合、[i]で発音される。例えば： ㄹ čongqun-u「窓の」はハルハ語では、 ㄹ чонхунь(注8)である。

(2) 語尾 <+un/+ün> が語幹に連ねて書かれる場合がある。例：

ᠭᠡᠷᠦᠨ ger+ün(266b:30)「家の」

ᠠᠶᠤᠯᠠᠰᠤᠨ ayula+s+un(285b:24)「山々の」

Dobu[1983]では、<-un/-ün> は多くの場合語幹から離して書かれるが、少数ながら語幹に連ねて書かれる場合もある。語幹に連ねて書かれる <+un/+ün> は、ガンジュール版では 19 回現れ、<-un/-ün> の総数の 2% を示す。これから見れば、<-un/-ün> が語幹と連ねて書かれるか、語幹から離して書かれるかは、ガンジュール版を刻版する際、完全に統一されていなかったことが分かる。

(3) 語尾 <-u/-ü> が母音字で終わる語幹に現れる。例：

ᠶᠠᠤᠦᠨ yau-u(185b:01)「溝の」

ᠴᠣᠵᠢᠦᠨ qojuyla-u(237b:02)「切り株の」

Dobu[1983]では、<-u/-ü> が母音字で終わる語幹に付いた例はない。17 世紀の『黄金史』には現れる。例えば：nidury_a-u「拳头的」、küriy_e-ü「房子的」[M.H. 奥尔洛夫斯卡娅 2004: 24]。

POPPE[1974: § 284] では、非古典式モンゴル文語では、口語の影響で、<-yin> <-un/-ün> <-u/-ü> は不規則的に使われる場合があると指摘している。

2.2. 対格語尾について

POPPE [1974: § 288] では対格語尾に次の二つの形が挙げられている：① <-i> 子音字で終わる語幹に付く。② <-yi> 母音字で終わる語幹に付く。この二つはいずれも語幹から離して書かれる。

ガンジュール版の対格を表す語尾の多くは、POPPE[1974]に記されている形と同じであるが、それ以外に、古典式モンゴル文語と異なる口語の現れ、表記のゆれ等も見られる。ガンジュール版における対格語尾の種類とその用法を出現回数の多い形と出現回数の少ない形に分けて示せば、表 2 のようになる。

表 2 ガンジュール版における対格語尾の種類と出現回数

出現回数の状況	語尾		語幹末字	現れる回数
出現回数が多い	① <	-i	子音字	2410 回※
	② <	-yi	母音字	756 回※
出現回数が少ない	① <	+i	母音字	160 回
	③ <	-u	子音字 n	6 回
	④ <	-ni	母音字	2 回

ガンジュール版の対格語尾の出現回数の多い規則的な特徴は POPPE[1974]と同じである(例を省略)。しかし、それに加えて、次のような少数の例外的な現れが見られる。

(1) 語尾 $\text{ᠶ} <+i>$ が語幹に連ねて書かれる (160 回)。例：

ᠪᠣᠯᠵᠢᠮᠤᠷᠢ bol $\text{ᠵ}ᠢᠮᠤᠷᠢ+i$ (252a:06)「小鳥を」

ᠶᠡᠭᠡᠰᠢ üge+s+i (195a:03)「話を」

$\text{ᠶ} <-i>$ は中世紀モンゴル文語では、多くの場合語幹から離して書かれるが、語幹に連ねて書かれる場合もある。ガンジュール版では、 ᠶ が語幹に連ねて書かれるのは、 ᠶ の総数の 6% を占める。 $\text{ᠶ} <+i>$ が両方現れるのは、ガンジュール版を刻版する際、その正書法が完全に統一されていなかったためだと考えられる。

(2) 対格語尾として $\text{ᠨ} <-u/-ü>$ という形が現れる (14 回)。

全て子音字 ᠨ で終わる語幹に現れる。例：

ᠶᠡᠭᠦᠨᠢ idegen- ᠦ ergü=n (327a:09)「食べ物を差し上げる」

[双福 1996 : 256]では、古代モンゴル文語では、 $\text{ᠨ} <-u/-ü>$ は対格語尾として現れると述べている。『元朝秘史』では、「訥」(nu) で対格を表す場合がある。例：必答訥 捏客周「我らを追って」。つまり、「訥」(nu) で発音される語尾で対格を表す場合があった(注 19)。

(3) 対格語尾として、 $\text{ᠨᠢ} <-ni>$ あるいは $\text{ᠨᠢ} <-i \text{ (独立形)}>$ という形が現れる (2 回)。例：

ᠶᠦᠷᠢᠨᠢ ür_e-ni/ür_e-i (196b:28)「結果を」

ᠪᠦᠬᠦᠨᠢ бүкү-ni/bü=kü-i (372a:16)「全てを」

ᠨᠢ は $\text{ᠨᠢ} <-ni>$ と $\text{ᠨᠢ} <-i>$ の両方の解釈が成り立つ。 ᠨᠢ が $\text{ᠨᠢ} <-ni>$ であれば、ガンジュール版に現れる $\text{ᠨᠢ} <-ni>$ の語尾は『元朝秘史』に対格語尾として現れる「泥」という形と対応すると考えられる。「泥」は子音字 ᠨ で終わる語幹に現れて、語幹末子音字 ᠨ が重なった形である。ガンジュール版では、母音字で終わる語幹に現れる。

2.3. 与格語尾について

POPPE[1974]では、与格語尾と位格語尾を与位格語尾(Dative-Ločative)として一緒にしているが、ここでは与格語尾と位格語尾に分けて検討する。

POPPE[1974 : § 285] では与格語尾に次の二つの形が挙げられている。

① ᠳᠦᠷᠳᠦᠷ $\text{ᠳ} <-dur/-dür>$ は母音字と子音字 ᠨ,ᠮ,ᠯ,ᠨᠭ で終わる語幹に付き、

② ᠲᠦᠷᠲᠦᠷ $\text{ᠲ} <-tur/-tür>$ は子音字 ᠪ,ᠮ,ᠯ,ᠨᠭ で終わる語幹に付く。

現代モンゴル文語では ᠳᠦᠷᠳᠦᠷ $\text{ᠳ} <-du/-dü>$ ᠲᠦᠷᠲᠦᠷ $\text{ᠲ} <-tu/-tü>$ の二つの形が挙げられる。

③ ᠳᠦᠷᠳᠦᠷ $\text{ᠳ} <-du/-dü>$ は母音字と子音字 ᠨ,ᠮ,ᠯ,ᠨᠭ で終わる語幹に付き、

④ ᠲᠦᠷᠲᠦᠷ $\text{ᠲ} <-tu/-tü>$ は子音字 ᠪ,ᠮ,ᠯ,ᠨᠭ で終わる語幹に付く。

ガンジュール版の与格語尾の多くは、POPPE 文法書と同じだが、少数の例外的な特徴が現れる。POPPE[1974]に現れない、現代モンゴル文語の与格語尾と同じ形の ᠳᠦᠷᠳᠦᠷ ᠳ が現れる。

ガンジュール版における対格語尾の種類とその用法を出現回数の多い形と出現回数の少ない形に分けて示せば、表 3 のようになる。

表3 ガンジュール版における与格語尾の種類とその出現回数

出現回数の状況	語尾	語幹末字	現れる回数	
出現回数が多い	① 𐎆𐎇	-dur/-dür	母音字と子音字 n,m,l,ng	3879 回※
	② 𐎆𐎇𐎉	-tur/-tür	子音字 b,γ/g,r,s,d	1462 回※
出現回数が少ない	① 𐎆𐎇	-dur/-dür	子音字 b,γ/g,r,s,d	5 回
	② 𐎆𐎇𐎉	-tur/-tür	母音字と子音字 n,m,l,ng	28 回
	③ 𐎆𐎇𐎈	-du/-dü	母音字と子音字 n,m,l,ng	13 回
	④ 𐎆𐎇𐎈𐎉	-tu/-tü	子音字 b,γ/g,r,s,d	10 回
			母音字と子音字 n,m,l,ng	4 回

(𐎆𐎇 は語幹から離して書かれる場合 <-tur/-tür> で転写する。𐎆𐎇𐎉 は語幹から離して書かれる場合 <-dur/-dür> で転写し、連ねて書かれる場合、<+dur/+dür> で転写する。同じく 𐎆𐎇𐎈 は <-tu/-tü> で転写し、𐎆𐎇𐎈𐎉 <-du/-dü> で転写する。)

上の表3で見れば、ガンジュール版では、与格語尾 𐎆𐎇 <-dur/-dür> が母音字と子音字 <n,m,l,ng> で終わる語幹に付くのが99.8%を示し、𐎆𐎇𐎉 <-tur/-tür> が子音字 <b,γ/g,r,s,d> で終わる語幹に付くのが97%を示す(例は省略)。つまり、蒙文ガンジュール木版が刻本された当時は、𐎆𐎇 <-dur/-dür> 𐎆𐎇𐎉 <-tur/-tür> の使われる環境(用法)が確立されていたことが分かる。しかし、これ以外にも、文法書に現れない語尾、あるいは使い方が異なる語尾が現れる。

(1) 𐎆𐎇 は子音字 <b,γ/g,r,s,d> で終わる語幹に現れる(5回)。例：

𐎆𐎇𐎆𐎇 qoyar-dur(272a:22)「二人に」

𐎆𐎇𐎆𐎇 ir-dür(256a:29)「刃に」

𐎆𐎇 <-dur/-dür> が子音字 <b,γ/g,r,s,d> で終わる語幹に離して書かれるのは、Dobu[1983]には見られない。17世紀の『アルタン・ハーン伝』には1回現れる。erdeni_š-dür「宝に」

(2) 𐎆𐎇𐎉 は母音字と子音字 <n,m,l,ng> で終わる語幹に現れる(28回)。例：

𐎆𐎇𐎉𐎆𐎇 mören-tür(202a:18)「江に」

Dobu[1983]では、与格語尾が語幹から離して書かれる形は 𐎆𐎇𐎉 <-tur/-tür> しか現れない。[栗林均1999:126]によれば、中世紀モンゴル文語の16種類の文献資料において 𐎆𐎇𐎉 <-tur/-tür> という形だけが現れ、𐎆𐎇 という形は存在しない。これから見れば、ガンジュール版の 𐎆𐎇𐎉 <-tur/-tür> が母音字と子音字 <n,m,l,ng> で終わる語幹に現れる現象は、中世紀モンゴル文語の正書法の残存と考えられる。

ガンジュール版以前の1714年版単行本『賢愚経』(注8)に現れる与格語尾の形を調べると、𐎆𐎇 が多く現れる。1714年版『賢愚経』における対格語尾の種類とその用法を出現回数の多い形と出現回数の少ない形で分けて示せば、表4のようになる。

表 4 1714 年版『賢愚経』における与格語尾の種類とその出現回数

1714 年版与格語尾				
出現回数の状況	語尾		語幹末字	現れる回数
出現回数が多い	ᠳᠦᠷ	-dur/-dür	母音字と子音字 n,m,l,ng	720 回※
			子音字 b,γ/g,r,s,d	22 回
出現回数が多い	ᠲᠦᠷ	-tur/-tür	子音字 b,γ/g,r,s,d	1467 回※
			母音字子音字 n,m,l,ng	2088 回※
出現回数が少ない	ᠳᠦ	-du/dü	母音字と子音字 n,m,l,ng	8 回
	ᠲᠦ	-tu/-tü	子音字 b,γ/g,r,s,d	10 回
			母音字と子音字 n,m,l,ng	9 回
ᠲᠦᠷ	-tu'r/-tü'r	子音字 r	1 回	

表 4 で見れば、1714 年版に現れる与格語尾では、最も数多く現れるのは、ᠳᠦᠷ であり、母音字と子音字 <n,m,l,ng> で終わる語幹に 2088 回現れ、子音字 <b,γ/g,r,s,d> で終わる語幹に 1467 回現れる。つまり、1714 年版の与格の規範と見なす特徴は、ᠳᠦᠷ <-tur/-tür> が語幹末字により書き分けられない。

これから見れば、1714 年版を編纂するときに、ᠳᠦᠷ <-dur/-dür> ᠳᠦᠷ <-tur/-tür> の使われる環境(用法)が確立されていなかった。ᠳᠦᠷ <-dur/-dür> ᠳᠦᠷ <-tur/-tür> の語幹末字により書き分ける正書法はガンジュール版で成立したことが分かる。

(3) 与格語尾には、ᠳᠦ <-du/dü> ᠲᠦ <-tu/-tü> という形が現れる。

ᠳᠦ <-du/dü> は母音字と子音字 <n,m,l,ng> で終わる語幹に現れる(13 回)。ᠲᠦ <-tu/-tü> は子音字 <b,γ/g,r,s,d> で終わる語幹に現れる(10 回)以外、母音字と子音字 <n,m,l,ng> で終わる語幹に現れる(4 回)。例：

ᠳᠦ <-du/-dü>(13 回)：

ᠠᠮᠢᠨ ᠳᠦ amin-du(266b:30)「命に」

ᠲᠦ <-tu/-tü>：

① 子音字 b,γ/g,r,s,d で終わる語幹に現れる場合(10 回)

ᠤᠵᠦᠭᠦᠷ ᠲᠦ üjügür-tü(351b:09)「先に」

② 母音字と子音字 n,m,l,ng で終わる語幹に現れる場合(4 回)

ᠲᠠᠷᠢᠶ᠋ᠠᠯᠠᠩ ᠲᠦ tariyalang-tu (358a:06)「農地に」

ᠶᠢᠷᠲᠢᠨᠴᠦ ᠲᠦ yirtinčü-tü (421b:13)「世間に」

語尾 ᠳᠦ <-du/dü> ᠲᠦ <-tu/-tü> は、現代モンゴル文語に現れる。[M.H. 奥尔洛夫斯卡娅 2004 : 34]では、「<-dur/-dür> <-tür/-tür> は文章語の形式で、<-du/-dü><-tü/-tü> は口語の形式である」と述べている。ガンジュール版では、ᠳᠦ <-du/-dü> ᠲᠦ <-tu/-tü> の現れる回数が僅かであるが、ᠳᠦ <-du/-dü> の用法は現代モンゴル文語と同じである。ᠲᠦ <-tu/-tü> の用法は現代モンゴル文語と異なり、語幹末の母音字と子音字により、書き分けられない。

ᠳᠦ <-du/-dü> ᠲᠦ <-tu/-tü> は 17 世紀以前の文献にはほとんど現れないが、17 世紀の『黄金史』、また『アルタンハーン伝』には現れる。『アルタンハーン伝』の ᠳᠦ <-du/-dü> ᠲᠦ <-tu/-tü> の現れる回数と出現環境を調べると、ᠳᠦ は母音字と子音字 <n,m,l,ng> の後に 10 回現れ、ᠲᠦ <-tu/-tü> は子音字 <b,γ/g,r,s,d> の後に 2 回、母音字と子音字 <n,m,l,ng> に 1 回現れる。これから見れば、ᠳᠦ <-du/-dü> ᠲᠦ <-tu/-tü> は 17 世紀の写本『アルタン・ハーン伝』の書かれた当時与格語尾に現れていたことが分かる。

POPPE[1974 : § 286] では、古典式モンゴル文語ではない文語には、ᠳᠦ <-du/-dü> ᠲᠦ <-tu/-tü> が使われると指摘している。

ガンジュール木版に現れる ᠳᠦ <-du/-dü> ᠲᠦ <-tu/-tü> は極めて少数の例外的現れである。これから見れば、それはガンジュール木版が刻版される際、与格語尾の統一から漏れた形である。

2.4. 位格語尾について

POPPE[1974 : § 287] では、位格語尾に① ᠠ <-a/-e> が挙げられている。子音字で終わる語幹に離して書かれる。

ガンジュール版では、位格を表す語尾に、POPPE[1974]に無い形が見られる。ガンジュール版における位格語尾の種類とその用法を出現回数の多い形と出現回数の少ない形で分けて示せば、表 5 のようになる。

表 5 ガンジュール版における位格語尾の種類と出現回数

出現回数の状況	語尾		語幹末字	現れる回数
出現回数が多い	① ᠠ	-a/-e	子音字	320 回※
出現回数が少ない	② ᠲ	-ta/-te	子音字 d	4 回
			母音字	23 回
	③ ᠳ	-da/-de	子音字	1 回
			母音字	2 回
		+da/+de	子音字	6 回
			母音字	2 回

ガンジュール版では、出現回数の多い形 ᠠ <-a/-e> は子音字で終わる語幹に現れる。つまり、これはガンジュール版の位格の規範と見なすことができる(例は省略)。しかし、これ以外にも、ᠳᠠ ᠲ という形が現れている。

POPPE[1974 : § 287] では、ᠲᠠ <-ta/-te> ᠳᠠ <-da/-de> は古典式モンゴル文語以前に現れる語尾であると指摘している。Dobu[1983]では ᠲᠠ <-ta/-te> という形だけが現れ、ᠳᠠ <-da/-de> という形は現れない。ガンジュール版では ᠳᠠ <-da/-de> の現れる回数が ᠲᠠ <-ta/-te> より多い。ᠳᠠ <-da/-de> <+da/+de> は語幹から離して書かれる場合と、繋げて書かれる場合がある。ᠲᠠ <-ta/-te> は子音字 <d> で終わる語幹にしか現れない。例：

𑖃𑖅 <-da/-de> が語幹から離して書かれる場合(24 回) :

𑖃𑖅𑖃𑖅𑖃𑖅 yadayun-da(343a:01)「貧乏な人に」

𑖃𑖅 <+da/+de> が語幹に連ねて書かれる場合(8 回) :

𑖃𑖅𑖃𑖅𑖃𑖅 degerem+de(340b:17)「強盗に」

𑖃𑖅𑖃𑖅𑖃𑖅 nasu+da(69b:09)「一生に」

𑖃𑖅 <-ta/-te> が語幹から離して書かれる場合(4 回) :

𑖃𑖅𑖃𑖅𑖃𑖅 nöküd-te(381a:07)「友に」

2.5. 造格語尾について

POPPE[1974 : §283 ~ §294]では造格語尾に、次の二つの形が挙げられている。

① 𑖃𑖅 <-bar/-ber> 母音字で終わる語幹に付き、② 𑖃𑖅𑖃𑖅 <-iyar/-iyer> 子音字で終わる語幹に付く。この二つはいずれも語幹から離して書かれる。

ガンジュール版の造格を表す 𑖃𑖅 <-bar/-ber> の用法には、POPPE[1974]の説明と異なる場合がある。また、造格語尾として 𑖃𑖅𑖃𑖅 <-yar> が現れる。

ガンジュール版の造格における造格語尾の種類とその用法を出現回数の多い形と出現回数の少ない形で分けて示せば、表 6 のようになる。

表 6 ガンジュール版における造格語尾の種類と出現回数

出現回数の状況	語尾		語幹末字	現れる回数
出現回数が多い	① 𑖃𑖅	-bar/-ber	母音字	241 回※
	② 𑖃𑖅𑖃𑖅	-iyar/-iyer	子音字	845 回※
	③ 𑖃𑖅𑖃𑖅	-yar	母音字	108 回※
出現回数が少ない	① 𑖃𑖅	+bar/+ber	母音字	91 回
		-bar/-ber	子音字	4 回

ガンジュール版では、造格語尾の出現回数の多い形には、𑖃𑖅 <-bar/-ber> 𑖃𑖅𑖃𑖅 <-iyar/-iyer> 以外に、𑖃𑖅𑖃𑖅 <-yar> が現れる。また、𑖃𑖅 が語幹に連ねて書かれるのは、𑖃𑖅 の総数の 38% を示す。𑖃𑖅𑖃𑖅 は子音字で終わる語幹に離して書かれるという規範が確立しているが(例は省略)、𑖃𑖅 の正書法は完全に統一されていない。これ以外にまた、𑖃𑖅 が子音字で終わる語幹に現れる。次に不規則な現れについて順に検討する。

(1) 造格語尾として $\text{ᠮᠠᠨ} <-\gamma ar>$ が現れる (108 回)。

ガンジュール版では、 ᠶᠣᠰᠤ *yosu*「道理に」の語幹に 105 回現れ、 ᠶᠣᠲᠠᠯᠠ *qotala*「皆」の語幹に 3 回現れる。例：

ᠶᠣᠰᠤᠶᠠᠷ *yosu+γar* (267b:03)「～通りに」

ᠶᠣᠲᠠᠯᠠᠶᠠᠷ *qotala+γar* (326a:17)「皆で」

POPPE[1974]には $\text{ᠮᠠᠨ} <-\gamma ar>$ が現れない。Dobu[1983]では、少数だが、造格語尾として $\text{ᠮᠠᠨ} <-\gamma ar>$ が現れる。例：*ama+γar*「口で」。

ガンジュール版では語幹 ᠶᠣᠰᠤ *yosu*「道理に」と ᠶᠣᠲᠠᠯᠠ 「皆」に、 ᠪᠠᠷ $<-\text{bar}/-\text{ber}>$ が現れない。これから見れば、 $\text{ᠮᠠᠨ} <-\gamma ar>$ は、極めて限定的な表現である。

$\text{ᠮᠠᠨ} <-\gamma ar>$ のこのような化石化した限定的な表現は現代モンゴル文語にも使われる。

(2) ᠪᠠᠷ $<+\text{bar}/+\text{ber}>$ が語幹に連ねて書かれる。(91 回)例：

ᠳᠠᠶᠤᠪᠠᠷ *dayu+bar* (192a:19)「声で」

ᠬᠦᠴᠦᠪᠠᠷ *küčü+ber* (375a:17)「力で」

POPPE[1974]では、 $\text{ᠪᠠᠷ} <-\text{bar}/-\text{ber}>$ は語幹に連ねて書かれない。18 世紀の『満洲実録』では、 $\text{ᠪᠠᠷ} <-\text{bar}/-\text{ber}>$ は 214 回語幹から離して書かれ、76 回語幹に連ねて書かれる。つまり、18 世紀のガンジュール木版に現れるこの特徴は、18 世紀の規範性の高い文章語が記される書写本にも同じく見られる現象である。

Dobu[1983]では、 ᠪᠠᠷ は多くの場合語幹と連ねて書かれ、少数の場合語幹から離して書かれる。 ᠪᠠᠷ が語幹と繋げて書かれる形について、[γarudi 2008 : 451]では、「中世紀モンゴル文語で、 $\text{ᠪᠠᠷ} <-\text{bar}/-\text{ber}>$ が語幹に連ねて書かれるのは、強調を表す $\text{ᠪᠠᠷ} <+\text{bar}>$ ($\text{ᠪᠠᠷ} <-\text{bar}/-\text{ber}>$ と同じ形で、独立して書かれる)から区別するためであった可能性が大きい」と述べている。

これから見れば、ガンジュール版で語幹に連ねて書かれる $\text{ᠪᠠᠷ} <+\text{bar}/+\text{ber}>$ は、Dobu[1983]の書法を継承していると考えられる。

(3) $\text{ᠪᠠᠷ} <-\text{bar}/-\text{ber}>$ が子音字で終わる語幹に現れる (4 回)。例：

ᠰᠡᠳᠬᠢᠯᠢᠪᠠᠷ *sedkil-ber* (264a:01)「心で」

ᠬᠦᠴᠦᠨᠪᠠᠷ *küčün-ber* (282a:26)「力で」

$\text{ᠮᠠᠨ} <-\text{iyar}/-\text{iyer}>$ は子音字で現れる語幹に 845 回現れる。 $\text{ᠪᠠᠷ} <-\text{bar}/-\text{ber}>$ が子音字で終わる語幹に 4 回しか現れないことは、 $\text{ᠪᠠᠷ} <-\text{bar}/-\text{ber}>$ は $\text{ᠮᠠᠨ} <-\text{iyar}/-\text{iyer}>$ の誤記である可能性が多い。

2.6. 奪格語尾について

POPPE[1974 : § 290] では奪格語尾として、 ᠠᠴᠠ $<-\text{ača}/-\text{eče}>$ という形が一つの語尾が挙げられている。それは母音字で終わる語幹と子音字で終わる語幹に区別なく離して使われる。

ガンジュール版では、奪格を表す語尾の多くは、POPPE[1974]と同じであるが、それ以外、 ᠴᠠ $<-\text{ča}/-\text{če}>$ ᠳᠠᠴᠠ $<-\text{dača}/-\text{deče}>$ が現れる。ガンジュール版における奪格語尾の種類とその用法を出現回数の多い形と出現回数の少ない形で分けて示せば、表 7 のようになる。

表7 ガンジュール版における奪格語尾の種類と出現回数

出現回数の状況	語尾		語幹末字	現れる回数
出現回数の多い方	① ᠠᠴᠢ	-ača/-eče	区別なく	675 回※
出現回数の少ない方	② ᠴᠢ	+ča/+če	母音字	6 回
		-ča/-če	子音字	1 回
	② ᠳᠠᠴᠢ	-dača/-deče	母音字	8 回
		+dača/+deče	母音字	2 回
			子音字	1 回

ガンジュール版では、出現回数の多い方は、 ᠠᠴᠢ <-ača/-eče> が語幹末に区別なく現れる。つまり、これはガンジュール版の奪格語尾の規範になる特徴である(例は省略)。これ以外にも、出現回数の少ない例外的な現れとして ᠴᠢ <-ča/-če> ᠳᠠᠴᠢ <-dača/-deče> が現れる。それぞれ以下のようである。

(1) 奪格語尾として ᠠᠴᠢ が現れる(6回)。

主に、方向、距離を表す語幹に現れる。6回語幹に連ねて書かれる。例：

ᠠᠴᠢᠠᠨ qola+ča (190a:15)「遠くから」

ᠠᠴᠢ は1回語幹から離して書かれる。

ᠮᠢᠴᠢᠨ miqan-ča (245a:26)「肉から」

ᠠᠴᠢ は6回語幹に連ねて書かれる。 ᠠᠴᠢ <-ača/-eče> は全て語幹から離して書かれることから見れば、 ᠠᠴᠢ が1回語幹から離して書かれるのは ᠠᠴᠢ <-ača/-eče> の誤記である可能性が大きい。

POPPE[1974]では、 ᠴᠢ <-ča/-če> は古典式モンゴル文語以前の文語に多く使用される語尾である。 ᠠᠴᠢ <-ača/-eče> は位格語尾 ᠠᠨ <-a/-e> と古風な ᠴᠢ <-ča/-če> の結合したものと指摘している。Dobu [1983]で調査した結果、 ᠴᠢ <-ča/-če> は7回現れ、6回が母音字で終わる語幹に連ねて書かれ、1回が母音字で終わる語幹から離して書かれる。つまり、 ᠠᠴᠢ が語幹と連ねて書かれる正書法は古典式モンゴル文語以前の文語に現れていたもので、それはガンジュール版にも現れることが分かる。

(2) ᠳᠠᠴᠢ <-dača/-deče> <+dača/+deče> が現れる。

ᠳᠠᠴᠢ は語幹から離して書かれるのは8回現れる。主に母音字で終わる語幹に現れる。例：

ᠳᠠᠴᠢᠠᠨ qola-dača (243a:05)「遠くから」

ᠳᠠᠴᠢᠨ baysi-dača (220b:31)「師から」

語幹に連ねて書かれるのは3回現れる。その内、1回は、子音字で終わる語幹 ger「家」に現れる。例： ᠳᠠᠴᠢᠨᠭᠡᠷ ger+deče (206a:24)「家から」。2回は、母音字で終わる語幹に連ねて書かれる。qola「遠い」の語幹に現れる。例： ᠳᠠᠴᠢᠨᠬᠠᠯᠠ qola+dača (56b:26)「遠くから」

POPPE[1974]では、 ᠳᠠᠴᠢ が現れない。[栗林均 1999: 128]では、「『孝経』には常に ᠳᠠᠴᠢ の形が現れ、 ᠳᠠᠴᠢ という形は存在しない」と述べている。ガンジュール版に ᠳᠠᠴᠢ が現れることは、ガンジュール版が刻版れる以前に、母音字で終る語幹に、あるいは語幹と連ねて書かれる場合接尾辞頭 ᠳ の形

2.9. 再帰所属の属・対格語尾について

POPPE[1974 : § 305 ~ § 306]では、再帰所属の属・対格語尾に次の二つの系列の語尾が挙げられている。

(1) ᠪᠠᠨ <-ban/-ben>(母音字の後)、 ᠶᠠᠨ <-iyan/-iyen>(子音字の後)

(2) ᠶᠤᠮᠠᠨ <-yuyan>(男性語の後)、 ᠶᠤᠭᠡᠨ <-yügen>(女性語の後)

ᠶᠤᠮᠠᠨ <-yuyan> ᠶᠤᠭᠡᠨ <-yügen> は、「対象が自分と緊密な関係にある」場合に用いられる。

2.9.1. ᠪᠠᠨ <-ban/-ben> ᠶᠠᠨ <-iyan/-iyen> について

ガンジュール版では ᠪᠠᠨ <-ban/-ben> ᠶᠠᠨ <-iyan/-iyen> が現れる。しかし、 ᠪᠠᠨ <-ban/-ben> の用法が POPPE[1974]と異なる場合がある。

ガンジュール版における ᠪᠠᠨ <-ban/-ben> ᠶᠠᠨ <-iyan/-iyen> の用法と出現回数を表で示せば、表 10 のようである。

表 10 ガンジュール版における ᠪᠠᠨ <-ban/-ben> ᠶᠠᠨ <-iyan/-iyen> の用法と出現回数

語尾		語幹末字	出現回数
ᠪᠠᠨ	-ban/-ben	母音字	77 回◎
	+ban/+ben		94 回◎
ᠶᠠᠨ	-iyan/-iyen	子音字	772 回※

(◎の符合で、出現回数が拮抗していることを示す。以下同様)

ガンジュール版では、 ᠶᠠᠨ <-iyan/-iyen> は POPPE[1974]と同じく子音字で終わる語幹にしか現れない。これから見れば、ガンジュール版の編纂のときには、 ᠶᠠᠨ <-iyan/-iyen> は一貫して、子音字で終わる語幹に離して書かれていたことが分かる。 ᠪᠠᠨ が語幹から離して書かれるのは 77 回であるが、94 回は語幹と連ねて書かれている。出現回数で拮抗している。これから見れば、ガンジュール版では、再帰所属の属・対格語尾を表す ᠪᠠᠨ が語幹から離して書かれるか、語幹と続けて書かれるかに関する正書法は確立していなかった可能性がある。例：

ᠠᠯᠠᠶ᠋ᠠᠪᠠᠨ alaya+ban(300b:07)「手を」

ᠪᠡᠶᠡᠪᠠᠨ beye+ben(351b:08)「体を」

Dobu[1983]では、 ᠪᠠᠨ <-ban/-ben> は多くの場合語幹と連ねて書かれる。2 回だけ語幹から離して書かれる。これから見れば、ガンジュール版に現れる ᠪᠠᠨ <-ban/-ben> の語幹と連ねて書かれる形は、Dobu[1983]の中世紀モンゴル文語の語幹に連ねて書かれる表記の特徴を引き継いでいる。

2.9.2. ᠶᠤᠮᠠᠨ <-yuyan>、 ᠶᠤᠭᠡᠨ <-yügen> ᠶᠤᠭᠡᠨ <-yü'gen> について

ガンジュール版では、男性語に ᠶᠤᠮᠠᠨ <-yuyan> が現れるが、女性語に、 ᠶᠤᠭᠡᠨ と並んで ᠶᠤᠭᠡᠨ という形が現れる。

ガンジュール版における ᠠᠶᠢᠨ <-yuyan>、 ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> の用法及び、出現回数を示せば、表 11 のようである。

表 11 ガンジュール版における ᠠᠶᠢᠨ ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ の用法及び、出現回数

格	語尾		語幹末字	現れる回数
再帰所属の属・対格	ᠠᠶᠢᠨ	-yuyan	男性語に	27 回※
			女性語	5 回
	ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ	-yügen	女性語に	56 回※
			男性語に	2 回
	ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ	-yü'gen	女性語に	24 回◎

表 11 から見れば、男性語には ᠠᠶᠢᠨ <-yuyan> が多く現れる。女性語には ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> が 56 回現れ、 ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> が 24 回現れる。女性語に現れる ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> の現れは回数で拮抗している。つまり、男性語には ᠠᠶᠢᠨ <-yuyan> が現れる規範は殆ど成立されているが、女性語に ᠠᠶᠢᠨ ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ が自由に交替して使われていた可能性がある。

(1) ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> について(24 回)(古典式モンゴル文語と異なる)例：

ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ em_yü'gen(306:16)「自分の妻の」

ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ bügüde-yü'gen(306:21)「自分の全てを」

従来のモンゴル語の文法書では、 ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> が取り上げられることはなかった。中世紀モンゴル文語では ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> は現れない。『アルタン・ハーン伝』で調査した結果、女性語に ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> が 7 回現れ、 ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> が 2 回現れた。『満洲実録』では、 ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> と ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> の両方が現れ、 ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> の出現回数が ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> より多い。これから、18 世紀の木版仏典、あるいは書写本のどちらにも、 ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> と ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yü'gen> の両方が使用されていたことが分かる。

(2) ᠠᠶᠢᠨ <-yuyan> が男性語のほか、女性語にも現れる(5 回)。例：

ᠠᠶᠢᠨ bey_e-yuyan(312b:13)「自分の体を」

ᠠᠶᠢᠨ <-yügen> が女性語のほか、男性語にも現れる(2 回)。例：

ᠠᠶᠢᠨ aq_a-yügen(351a:01)「自分の兄の」

中世紀モンゴル文語では、 ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> は女性語にしか現れない。 ᠠᠶᠢᠨ <-yuyan> はほとんど男性語に現れるが 1335 年の張氏先塋碑(張應瑞碑文)では 1 回だけ女性語に付いている例がある。例： ᠰᠡᠳᠻᠢᠯ sedkil-yuyan「自分の心を」。

ガンジュール版に現れる、 ᠠᠶᠢᠨ <-yuyan> ᠠᠶᠦᠭᠦᠨ <-yügen> が男性語と女性語に混同して使われるのは、これらを書き分ける正書法が確立されていなかったためであった。

3. まとめ

1. 蒙文ガンジュール木版仏典は古典式モンゴル文語の典型的な資料としてモンゴル文語の研究では重要な文献資料として位置づけられる。古典式モンゴル文語の特徴は現代モンゴル文語とほとんど同じであると理解されてきた。しかし、18世紀に刻版された蒙文ガンジュール木版『賢愚経』には、今まで知られる古典式モンゴル文語と異なる特徴が現れることが分かる。
2. ガンジュール木版『賢愚経』の名詞の曲用語尾について、その形と出現回数を網羅的に調査した結果、その特徴を次のように指摘することができる。

(1) 二種類の同じ語尾の異なった形、綴りが出現回数で拮抗している特徴がある。これは自由に交替して使われることが許容されていて、規範が確立していなかった可能性がある。具体的には：

- ① ᠮᠠᠨ が語幹と連ねて書かれる表記と語幹から離して書かれる表記。
- ② ᠮᠠᠨ <-yügen> と ᠮᠠᠨ <-yü'gen> という形、ともに女性語に使われる。

(2) 古風の化石化した程度格語尾 ᠮᠠᠨ <-čay_a> ᠮᠠᠨ <-čege> ᠮᠠᠨ <-čige> が現れ、「形容詞」として使われる。

(3) 属格、対格、与格、位格、奪格、造格、共同格には、出現回数の多い規則的な現れ(特徴)と並んで、出現回数の少ない例外的な現れが見られる。少数の例外的な現れは、より古い時代の特徴が残存しているもの、あるいは口語的な現れが露出しているもの、誤記であることが考えられる。

口語的な現れが露出しているものとして：① 字音字 <n> で終わる語幹に属格語尾に、 ᠮᠠᠨ <-i> が用いられる。② 母音字で終わる語幹に ᠮᠠᠨ <-u/-ü> が現れる。③ 対格語尾として、 ᠮᠠᠨ <-ni> あるいは <-i(独立形)> という形が現れる。④ 共同格語尾として、 ᠮᠠᠨ <-tai/-tei> ᠮᠠᠨ <+dai/+dai> という形が現れる。

より古い時代の特徴が残存しているものとして：① 対格語尾 ᠮᠠᠨ <+i> が語幹に連ねて書かれる。② 与格には、語尾 ᠮᠠᠨ <-du/dü> ᠮᠠᠨ <-tu/-tü> が現れる。③ 位格語尾に、 ᠮᠠᠨ <-ta/-te> ᠮᠠᠨ <-da/-de> が現れる。④ 奪格語尾に ᠮᠠᠨ <-ča/-če> が現れる。

3. ガンジュール版をそれ以前の1714年版蒙文『賢愚経』と比較することにより、与格語尾 ᠮᠠᠨ <-dur/-dür> ᠮᠠᠨ <-tur/-tür> の書き分けがガンジュール版で成立したことが分かった。

注

- (1) 原文は以下のとおり。

The spread of Buddhism made good progress in the sixteenth and seventeenth centuries. This new period of history, called the Buddhist Renaissance of Mongolia, coincides with the beginning of a new period in the history of the Mongolian script.... A unified orthography was introduced, the grammar of the written language was purged of colloquial elements, and all inconsistencies were eliminated. The letters acquired their present form.... Classical Written Mongolian failed to dominate all the literary activities; it was used only in the xylographic editions of Buddhist works.

(2) 原文は以下の通り。

"Classical Mongolian is...Tibetan lamaistic canon, the Kanjur, ... It was fixed in its final form by the revised edition xylographed in Peking in 1720, and in this latter shape has remained the literary norm to the present day."

(3) 『賢愚経』は『賢愚因縁経』とも言われる。モンゴル語に翻訳されて以来、**ᠤᠯᠢᠭᠢᠷ ᠤᠨ ᠳᠠᠯᠠᠢ** üliger-ün dalai「説話の海」、また、**ᠤᠯᠢᠭᠢᠷ ᠤᠨ ᠶᠢᠨ ᠰᠤᠳᠤᠷ ᠣᠷᠤᠰᠢᠪᠠ** (üliger-ün dalai-yin sudur orusiba)、**ᠰᠢᠯᠢᠷᠦᠨ ᠣᠨᠤᠯᠤᠳᠤ ᠮᠡᠭᠡᠳᠡᠬᠡ ᠰᠤᠳᠤᠷ** (siliryun onultu kemegedekü sudur) などの名で呼ばれる。

(4) 跋文の内容は以下のとおり(ローマ字転写記号については注7を参照)。

eideb üliger-tü-yin sudur-i, enedkeg-ün kelen-eče ulamjila=n. endegürel ügei töbed-ün kele+ber:: delgerenggüi_e sayitur orčiγul=ju bü=r_ün.

(5) 『大正蔵』(Vol.55, p67c-a)を参照。原文は以下のとおり。

河西沙門釋曇學威徳等。凡有八僧。結志遊方遠尋經典。於于闐大寺遇般遮于瑟之會。……三藏諸學各弘法寶。說經講律依業而教。學等八僧隨縁分聽。於是競習*胡音折以漢義。精思通譯各書所聞。還至高昌乃集爲一部。既而踰越流沙齋到涼州。于時沙門釋慧朗。河西宗匠。道業淵博總持方等。以爲此經所記源在譬喻。譬喻所明兼載善惡。善惡相翻則賢愚之分也。前代傳經已多譬喻。故因事改名。號曰賢愚焉。元嘉二十二年歲在乙酉。始集此經。

(6) 『大正蔵』(Vol.55, p12c)による。原文は以下のとおり。

宋文帝時。涼州沙門釋曇學威徳於于闐國得此經胡本、於高昌郡譯出。

(7) モンゴル語のローマ字転写は、NICHOLAS POPPE, *GRAMMAR OF WRITTEN MONGOLIAN*.

1974にいくつかの変更を加えた方式による。

1) 母音字 <o> <u> と <ö> <ü> は字形で区別されないため、ローマ字転写の便利を考え、第二音節以降の男性語の円唇母音字は <u> で転写し、女性語の円唇母音字は <ü> で転写する。

例: **ᠪᠣᠯᠵᠢᠮᠤᠷ** boljūmur 「小鳥」 **ᠮᠣᠷᠦᠴᠡᠭᠡ** mörү+čege 「肩までの」

2) 動詞の語幹と活用語尾の境界に「=」(イコール)の記号を付す。これは、動詞の語尾の検索に便利のためである。例: **ᠤᠿᠲᠤ** uytu=ju 「迎える」

3) 綴り上の特徴をはっきり示すため次のような補助記号を使っている。

「+」(プラス)名詞の語幹と曲用語尾が繋げて書かれている場合。例: **ᠭᠢᠷᠦᠨ** ger+ün 「家の」

「_」(アンダースコア): 一つの語が分かれて書かれている場合、その境界。

例: **ᠶᠤᠶᠠᠴᠠᠭᠠ** yuya+čay_a 「股(もも)まで」

「-」(ハイフン): 名詞類の語幹と分かれて書かれる曲用語尾との境界。

例: **ᠪᠡᠶᠡᠲᠦᠷ** bey_e-tür 「体に」

4) 出現位置

ガンジュール版の出現位置を示す数字は順に、巻数、頁数+表と裏、行番号を表わす。

例: 266b:30 (266 頁裏の 30 行)

このほか、異なった字形を区別し、ローマ字転写から元の字形が再現出来るようにするため、以下のローマ字転写を用いる。従来のモンゴル語の文法書に取り上げられない表記の **ᠶᠦᠭᠡᠨ** を <-yü'gen> で転写する。

(8) [塩谷茂樹 中嶋善輝 2011: 83]の例による。

(9) 清康熙五十三年(1714)の木版: 東洋文庫所蔵の木版刷りを利用する。

タイトル: **ᠤᠯᠢᠭᠢᠷ ᠤᠨ ᠳᠠᠯᠠᠢ ᠶᠢᠨ ᠰᠤᠳᠤᠷ ᠣᠷᠤᠰᠢᠪᠠ** (üliger-ün dalai-yin sudur orusiba)

引用文献

[英語]

Grønbech, Kaare and Kruege, John R.

1955 *An introduction to classical (literary) Mongolian*. Otto Harrassowitz

POPPE, NICHOLAS

1955 *Introduction to Mongolian Comparative Studies*. Helsinki

POPPE, NICHOLAS

1974 (3rd ed.) *GRAMMAR OF WRITTEN MONGOLIAN*. WIESBADEN.

[日本語]

宇井伯壽 鈴木宗忠 金倉圓照 多田等観

1934 『西藏大蔵経総目録』東北帝国大学法文学部。

烏燕嘎

2013 『『満洲実録』におけるモンゴル語の言語学的特徴』修士論文。

金岡秀郎

1987a 「モンゴル語訳『賢愚経』について～その成立に関する基礎的研究」日本モンゴル学会『モンゴル研究』18号、50-77。

金岡秀郎

1987b 「清代モンゴル翻訳文献概史—「メルゲッド・ガルヒン・オロン」成立の背景」大倉山論集、第21輯 195-230、大倉精神文化研究所。

栗林均

1999 「『孝経』のモンゴル文語における曲用語尾の特徴」『ALTAI HAKPO JOURNAL OF THE ALTAIC SOCIETY OF KOREA』No.9、125-134。

栗林均 确精扎布

2001 「『元朝秘史』モンゴル語全単語・語尾索引」東北大学アジア研究センター『東北アジア研究センター叢書』第4号

塩谷茂樹 中嶋善輝

2011 『モンゴル語』世界の言語シリーズ3、大阪大学出版社

Ts. シャグダルスレン

2002 「古典式モンゴル文語あるいはモンゴル経典言語の若干の特徴について」日本モンゴル学会『日本モンゴル学会紀要』、第32号、41-53。

Daisetz T. Suzuki

1961 『西藏大蔵経総目録・索引』西藏大蔵経研究会。

デレヒ

2011 「モンゴル語『大蔵経』について」『北海道言語文化研究』第9号、23-30頁。

服部四郎

1987 『アルタイ諸言語の研究Ⅱ』(服部四郎論文集2)三省堂。

森川哲雄

1985 「十七世紀初頭の内蒙古における三人の仏教の高揚者について」蒙古史研究、第1輯、中国蒙古史学会

吉田順一

1998 『アルタン・ハーン伝』訳注、風間書房。

[中国語]

德勒格

1998 《内蒙古喇嘛教史》内蒙古人民出版社。

M.H. 奥尔洛夫斯卡娅著、郭守祥译

2004 《黄金史语言》(阿尔泰丛书)内蒙古教育出版社。

乔吉

2011 《蒙古族全史·宗教卷》内蒙古人民出版社

乔吉

2007 《蒙古佛教史》内蒙古人民出版社。

清格爾泰

1991 《蒙古语语法》内蒙古人民出版社。

苏鲁格 那本斯来

1999 《简明内蒙古佛教史》内蒙古文化出版社

中国蒙古文古籍总目编委会

1999 《中国蒙古文古籍总目(下)》

[モンゴル語]

Bousiyang 包祥 (包祥)

1984 《*ᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠤᠰᠦᠭ ᠪᠢᠴᠢᠭ-ᠦᠨ ᠤᠪᠠᠶᠠᠨ* (蒙古文字学)》内蒙古教育出版社。

Dobu 道布 (道布)

1983 《*ᠬᠡᠯᠡᠨ ᠤᠰᠦᠭ ᠪᠢᠴᠢᠭ-ᠦᠨ ᠳᠤᠷᠠᠰᠠᠯᠤ ᠪᠢᠴᠢᠭ-ᠦᠨ* (回鹘式蒙古文文献汇编)》内蒙古民族出版社。

γarudi 嘎日迪 (嘎日迪)

2001 《*ᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠬᠡᠯᠡᠨ ᠤᠰᠦᠭ ᠪᠢᠴᠢᠭ-ᠦᠨ ᠣᠷᠴᠢᠨ ᠴᠠᠭ*-un mongγul kele (现代蒙古语)》内蒙古人民出版社。

2008 《*ᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠬᠡᠯᠡᠨ ᠤᠰᠦᠭ ᠪᠢᠴᠢᠭ-ᠦᠨ ᠤᠰᠤᠯᠤᠯ ᠤᠨ ᠤᠳᠤᠷᠢᠳᠠᠯ* (中古蒙古语研究导论)》内蒙古人民出版社。

Tš · norjīn 策·諾尔金 (策·諾尔金)

2006 《*ᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠪᠢᠴᠢᠭ-ᠦᠨ ᠬᠡᠯᠡᠨ ᠤ ᠶᠣᠯ ᠶᠣᠰᠤ* (蒙文原理)》内蒙古教育出版社。

šongqur 双福 (双福)

1996 《*ᠮᠣᠩᠭᠤᠯ ᠬᠡᠯᠡᠨ ᠤᠰᠦᠭ ᠪᠢᠴᠢᠭ-ᠦᠨ ᠤᠰᠤᠯᠤᠯ* (古蒙古语研究)》内蒙古教育出版社。

